令和２年度
「地域共生社会推進セミナー」
報　告

日 時：令和2年（2020年）12月9日（木）

場 所：アイリス愛知 2階 コスモス

開 会 挨 拶

愛知県社会福祉協議会　専務理事　篭橋 謙

本日は、新型コロナウイルス感染症第３波のただ中にもかかわらず、このセミナーにご参加をいただき、誠にありがとうございます。感染防止対策を取っての開催となり、ご参加の皆様方には例年と違ってご不便をお掛けいたしますが、何とぞご理解・ご協力の程、よろしくお願い申し上げる次第です。

さて、その新型コロナウイルスは私たちの日常生活の在り方を一変させ、人々は、孤立や生活困窮など、様々な課題に直面しています。ただ、その一方で、こうした状況は、誰かとつながっていること、誰かを支えたり支えられたりしていること、そして互いに誰かを思いやること、そうしたことの大切さを私たちに改めて気付かせることにもなりました。

新型コロナウイルスの影響が長期化する中において、感染防止策を講じながら、つながることを諦めない、途切れさせない活動、そしてまた新たなつながりを創り出す活動こそが、今、求められているのではないかと思います。

このセミナーは、平成 22 年度から開催しておりました「社会貢献活動推進セミナー」を、２年前の平成 30 年度から「地域共生社会推進セミナー」と名称を変え、身近な地域で誰もが支え合う地域共生社会の実現に向けたつながりとアイデアを生み出すことを目的として開催しているものです。

今日の私たちを取り巻く社会環境に目を向けますと、団塊の世代が後期高齢者となり、介護・医療などの社会保障費の急増が懸念される「2025 年問題」、そして団塊ジュニア世代が前期高齢者となる「2040 年問題」など、様々な課題が叫ばれているわけですが、新型コロナウイルスの嵐は、正常な日常を吹き飛ばすことはあっても、そうした課題をも吹き飛ばすわけではなく、たとえコロナの嵐が収束したとしても、これらの課題に直面する 2025 年や 2040 年は確実にやってきます。

こうした中、地域における生活支援においては、様々な制度の活用とともに、ボランティアや住民同士の支え合いなど、インフォーマルな活動への期待が高まってきております。本年２月、全社協は『福祉ビジョン 2020』を公表いたしましたが、このビジョンは、国が進める「地域共生社会の実現」と、国際的に進められている SDGs の「誰一人取り残さない持続可能で多様性と包摂性のある社会の実現」という２つの方向性を基に、共に生きる豊かな地域社会の実現を目指すこととしています。

社会福祉協議会は、地域共生社会の実現に向け、身近な地域での包括的な支援体制づくりや協働・連携の仕組みづくりを皆様方と共に進めており、この意味からも、SDGs の「誰一人取り残さない社会の実現」は、地域共生社会の実現と軌を一にするものであると考えております。

そこで、本日は、一般社団法人 SDGs 市民社会ネットワークの新田英理子様をお招きし、『SDGs とは何か。社会はどうかわるのか』と題した講話をお願いすることといたしました。

それに続いて、行政、社協、企業、社会福祉法人の皆様から、それぞれが実践されている活動をご紹介いただき、地域でのつながりを皆様と一緒に考えて参ります。

そして、セミナーの最後には、新しいつながりが生まれることを期待してネットワークタイムの時間を設けました。

このセミナーが皆様の新しい出会いの場となり、また今後の活動への参考となりますことをご期待申し上げまして、開会にあたりましての挨拶とさせていただきます。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

Ⅰ 講話
『SDGs とは何か。社会はどうかわるのか ～市民社会組織の視点から～』

一般社団法人 SDGs 市民社会ネットワーク
理事・事務局長　新田　英理子　氏

SDGs 市民社会ネットワークという団体で事務局長をしております新田と申します。
きょうは、SDGs によって社会がどう変わるのかという情報共有をさせていただければと思っております。

まず、皆さんとは「どうして SDGs なのか」ということを、もう一度ぜひご確認いただきたいです。そのために、どうして SDGs が採択されたのかということについて、基本的な解説をしたいと思っております。

社会は、本当にどんどん変わってしまっています。新型コロナウイルス感染症が収まっても、少子高齢化の問題は解決しません。地球温暖化の問題は、実は 1970 年ぐらいから、知識としては多くの人が知っていました。しかし現在、残念ながら温暖化問題は体感できる段階に入っています。
そういう中で、SDGs を情報として皆さまがより知っていただくことで、日々の活動や、私たちが届けたい未来が少しでも良いものになればと思っています。
それには、SDGs をすべての人が実践したり、参加されることによってしか達成できない、ということについて共有できると嬉しいです。NPO の立場からですが、ぜひ情報共有させていただければと思います。

最初に自己紹介をさせていただきます。私は 1970 年、大阪万博の年に、富山県高岡市で生まれ、大学時代は京都で過ごし、その後、東京の民間企業に就職しました。
1998 年に特定非営利活動促進法（以下､NPO 法）ができ､NPO とボランティアの違いが認識された頃に､私は「日本 NPO センター」というところの職員になりました。これからの社会は、企業や行政といった立場を超え、社会をより良くしていきたいと思った人がネットワークを作り、より豊かな社会づくりを目指せるようになりたい。そんな思いから働き始めました。
NPO 法が成立して 20 年たち、今は内閣府の調査では、NPO を 90% 以上の方が知っていると回答されます。NPO という言葉も 20 年かかったけれども広がったのであれば、より多くの人たちと共有できる概念の SDGs も、広げられるのではないか。SDGs の達成期限まで残り 9 年しかないということもあって、今は「SDGs 市民社会ネットワーク」というところで活動しています。

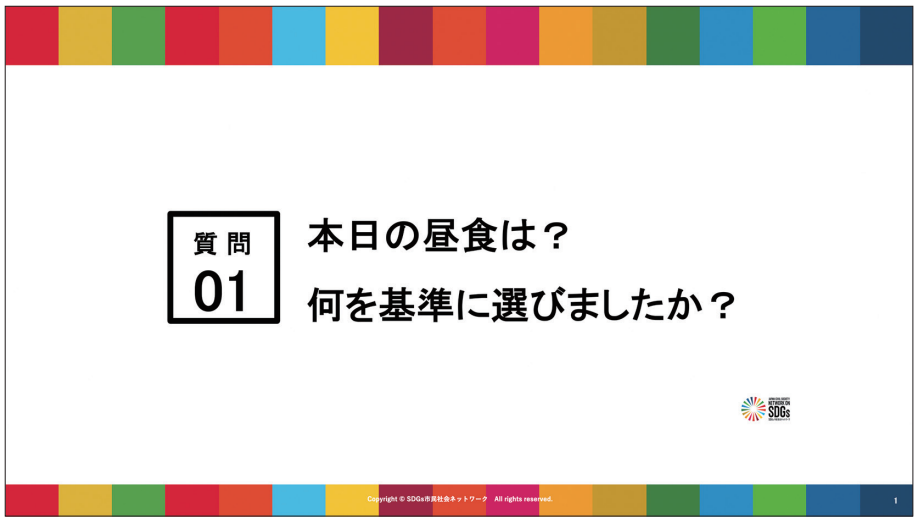
私がとても SDGs に共感している理由の一つは、誰かだけが幸せになればいいではなくて、誰一人取り残さないんだと明確にうたっていることです。英語の頭文字で LNOB（leave no one behind）と言います。NPO で活動している者としてとても共感し、これを政府も企業も一緒になってやってくれるんだったら、そんなに有り難いことはないと思いました。

NPO 活動は「当事者だけが頑張る」という感じでしたが、SDGs は「学生も子ど

もも、お年寄りだろうが、どんな人も一緒にやっていく。だからこそ誰も取り残さない」ということが理念として謳われていて、それがとても良いと思っています。

私たちSDGs市民社会ネットワークは、今はまだ140ほどの団体のネットワークです。しかし、「誰一人取り残さないでSDGsを達成する」ということに、とてもこだわっている団体です。

日本政府や経済界で進められているSDGsにも、「誰一人取り残さない」という視点をより政策の中に入れてほしい。そのために、政策提言などさまざまなツールを使って訴えているというのが、普段やっている仕事になります。



皆さんに、いくつか質問を用意してみました。皆さん、今日のお昼ご飯を、何を基準に選ばれましたでしょうか。イ、価格。ロ、カロリー。ハ、手軽さ。ニ、添加物の有無。ホ、環境配慮。ヘ、ブランド。この質問には正解があるわけではないので、気にせず選んでいただければなと思います。

次の質問です。これだけ環境配慮が必要だとか、エコとか言われている中で、食器をどうやって洗っておられますか。イ、洗剤は使わないでアクリルタワシで。ロ、油物は紙や古布で拭き取ってから。ハ、貯めすすぎで少量の植物性洗剤を。

次は、ちょっと毛色が変わる質問です。ご近所の困り事や地域での困り事は、一体、誰が解決しますか。イ、私自身が。ロ、行政が。ハ、近所の人や地域の人が。

次の質問です。世界の困り事は一体、誰が解決しますか。イ、私自身が。ロ、国や行政機関が。ハ、国連など国際機関が。

最後の質問です。「地域共生社会」という概念は、どのくらい定着していると皆さんお考えでしょうか。イ、職場では定着している。ロ、同じ業界で業務をしている人たちとは同じイメージでやりとりされている。ハ、近所の人たちもイメージできるようになっている。

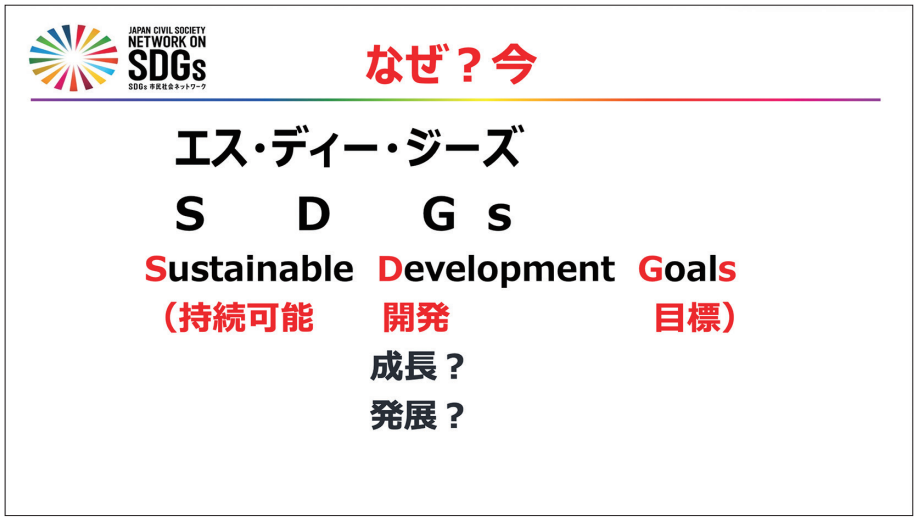
今日はせっかくのリアルの場なので、もしよろしければ、お隣の方と、1問目から5問目までの回答を話し合っていただけますでしょうか。

皆さん、ちょっとモヤモヤされませんでしたか。この質問に、正解があると思われたでしょうか。SDGsについてこれからお話ししていきますが、同様にモヤモヤし、あまりすっきりしないと思います。なぜなら、SDGsは「目標」であって「解答」ではないからです。

2030年の世界は、誰もまだ正解を知らない。しかしそ

れが、良いところでもあります。「ここに行きなさい」というイメージはあるけれど、行き方は誰もまだ正解を知らない。だからこそ、みんなで見つけるしかない。それが SDGs です。モヤモヤしたり、違うかなと思うときもあるけれども、やるしかないというのが SDGs なんです。

SDGs が採択された 2015 年の時点では「あとまだ干支が一回りあります」と言っていましたが、あと 10 年しかない、結構近い将来の話になりました。「2030 年は自分が何歳のときの世界の話だ」と、イメージしながら聞いていただけると有り難いなと思っています。



「なぜ今なのか」ということが、腑に落ちる・落ちないかというのは、結構、大事なポイントです。SDGs は Sustainable（持続可能）の S、Development（開発）の D、Goal、それが束になっているから複数形の小文字の s が付いていて「SDGs」となっています。なので「エスディジーエス」よりも「エスディジーズ」と発音します。あと開発というと、日本では山を切り崩すようなイメージをしがちなので「持続可能に成長し続けるにはどうしていけばいいか」という目標だと捉えていただくと、しっくりくる方が多いのかなと思っています。

これは私の私見ですが、日本の社会は大まかに言えば、行政と企業が大きくあって、それぞれが社会に果たすべき役割が存在します。そして、ここ 20 年でボランティアや NPO の果たすべき役割が大きくなってきました。私は NPO の特定非営利活動促進法という法律について、先ほど冒頭で自己紹介したように、深く関わってきました。そして 20 年たって、やっといろいろな方にご承知おきいただくようになりました。そんな NPO を、ほんの少し、法律上の NPO より広い意味で捉えていただきたいなと思っています。

ちなみに、NPO とボランティアについては日本ではまだ混同されている場合が多く、「NPO は無償で無給」だと誤解されがちです。ボランティア（個人）の概念と、NPO（組織）の概念として、しっかり分けて捉えられるようになると、より有り難いなと思っています。

阪神・淡路大震災が起こる前くらいの頃は、日本では政府と企業というのはとても大きな役割を持っていました。しかし 1995 年、震災でたくさんの市民が災害ボランティアとして参加したことから、この年を「ボランティア元年」と呼んでいます。そのあたりから、企業や行政だけ頼みではなく、よりバランスの取れた社会作りをしようという議論がされていました。

しかし最近は、さらに企業がとても大きな役割を担うようになってきています。世界中の国の資産を集計すると、今だと 1 位から 100 位までの中で、去年の数字では半分は、Google や、Amazon といった一民間企業が占めています。だからこそ、政府や NPO に求められる強い倫理観や公共性的が、企業にも求める必要があると、CSR なども強く言われるようになってきたのが、最近の顕著な状況だと思います。

最近の社会の変容で大きなもう一つの要素は、社会と経済、環境が SDGs では重要な要素のバランスなのですが、そのバランスが少し崩れているように思います。だから、新型コロナウイルス問題が起こったとき、どのような対策が必要なのかしっかり見た上で成立させることがとても重要になると思います。

SDGs の 17 の目標を並べると、どうしても各目標が並列の関係に見えます。しかし SDGs の先進国であるフィンランドの研究機関が提唱した、「SDGs ウェディングケーキ」という図があります。これは自然資本がベースにあり、その上に社会関係資本がある。皆が一緒に住み続けられる地域を、いかにつくっていくか。自然資本の上に、災害

に強いとか、経済的な資本や知的資本、人的資本というのが乗っかって、それらが連携していくというように、SDGs の目標を解釈したほうが、より分かりやすいと思います。

SDGs が作られる 2010 年以降、日本では東日本大震災やそれに伴う原発事故など制御不能な事態が露呈していました。でも実を言うと、それは世界でも同じことで、「今までやり方では、地球は持続不能なんじゃないか」という認識を多くの人たちが共有してきたのが前提としてあります。

ですから SDGs は、「より発展しよう」というような前向きな目標ではありません。でも、悲観的になったり投げやりになるのではなく、「みんなが参加しないと達成できないから、前向きに捉えるためにはどうしたらいいか」ということを、散々議論されて出来上がってきたものです。

私たちは何となく、地域の課題と世界の課題を切り分けて考えがちです。「大きな課題は自分とは関係ない」と。でも私は、大きな課題も小さな課題も不可分だと思っています。

世界的には飢餓や貧困の問題が深刻ですが、日本は戦後それを克服したと思われています。でも今、日本は OECD 諸国の中でも、子どもの貧困や一人親家庭の困窮が問題になっています。経済格差がますます広がっていることは、世界の課題でしょうか、日本の課題でしょうか。分けて考えられるでしょうか。

それが COVID-19（新型コロナウイルス感染症）の出現で、より可視化されるようになった。ネットカフェ難民の人が、コロナによるロックダウンで住むところがなくなったり。潜在的なホームレスは統計よりずっと多かったことが露呈しました。

今日、このセミナーに来ておられる方は、そもそもそういう問題こそ大事だとずっと訴えてこられた側の方だとは思います。それが今では、より一般の方にも見えるようになってきているという状況だと思います。私は、これは全て人権に関わる課題だと思っています。

（故郷の）富山で最初にコロナにかかった方は、残念ながら、家族ごと引っ越されたということを、親戚から電話で聞きました。病気ではなく、差別の問題です。

本当に愕然として、ショックを受けました。私たちは、エイズのときに学んだ教訓を、どうしてコロナで生かせなかったんだろう。実際、エイズ問題にずっと取り組んでおられた人たちは「今後、コロナ差別が起きますよ」と、強く言っておられました。そんな厳しい状態が起こってしまうことになると思います。

もう少し身近な問題に関連づけましょう。皆さん、1 個 300 円のお弁当って、持続可能だと思いますか。確かに便利ですが、朝早くから一日中、お弁当がいろんなお店にちゃんと並んでいるということは、どういうことなんだろう。そう考えると、いろいろな問題が見えてきます。皆さんに「お昼ご飯はどういうイメージで選ばれましたか？」という質問をしましたが、そもそも 1 個 300 円のお弁当は持続可能なんでしょうか、ということも考えて

いただけるといいなと思っています。

SDGs には本名があるんです。本名は「我々の世界を変革する持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」といいます。

国連で採択された A4、25 ページの文章は、「我々の世界を変革しよう、持続可能な発展や成長ができるように、2030 年にこれだけのことを目標としてみんなで採択しよう」という文章なんです。

その文章の中に、「貧困がない、持続可能な世界を次の世代の人に受け継いでいく」ということがまず書かれてあります。これは 2015 年 9 月 25 日の国連総会で採択されました。誰も否決しなかった珍しい文章です。国連に参加している全ての国が採択した事実がとても重要です。なぜなら、どの国の人も知っている共通言語になるからです。

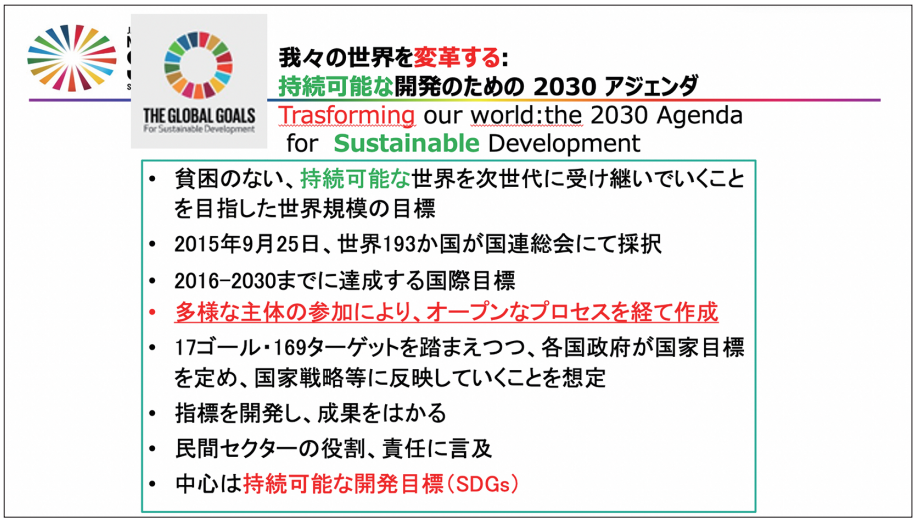
そしてこの文章は、13 回も下書きが出たそうです。より多くの人が納得して参加するためには、より多くの人に参加してもらうということが、国連でもやっと定着してきました。国連では 2000 年以降、このようなアジェンダを作るときには、NGO や NPO、女性、障害者と、さまざまな団体や人が参加します。また、いろんな産業界、政府もその一つとして参加するという形で、多様な主体の参加によって作成されています。

だから、私たちも実は、そのプロセスに参加をしていて、「これを強く言ってほしい」「こういう条文を入れてほしい」ということを、言い続けてきました。全部入ったかというと、もちろん入っていないこともたくさんあるし、より多くの人が合意するためには妥協して緩やかな文章になっている部分もあります。実際、武器に関しての記述はほとんどありません。そういう欠点もありますが、SDGs はいろいろな人たちが議論し合って作られたものです。ですから少し身近に感じてもらいたいのです。

SDGs は、ただの絵空事ではいけないということで、指標が作られています。それが「KPI」という数値目標です。ただ、とても曖昧な指標です。193 カ国もあると経済状況なども違うので、それは各国で決めてくださいということになっています。ですから日本でも、地域で指標を作ろうという動きもかなり進んでいます。愛知県でも SDGs 目標の指標等を作られていると思います。そういう指標を大きくまとめたのが、SDGs なんですね。

構造的にいうと、アジェンダがなぜ必要なのかを説明し、「こういう社会、世界にしよう」ということを具体的に達成するための 17 の目標が記載されている。その 17 の目標も、ものすごく大きなものです。

1 番の目標に「あらゆる形態、あらゆる場所の貧困をなくす」と書いてあります。それを達成するために、より細かく、169 個のターゲット（目標）があり、その達成具合を指標で表している。毎年、それがどれだけ達成したか、どのようになったかというのが、フォローアップやレビューになります。

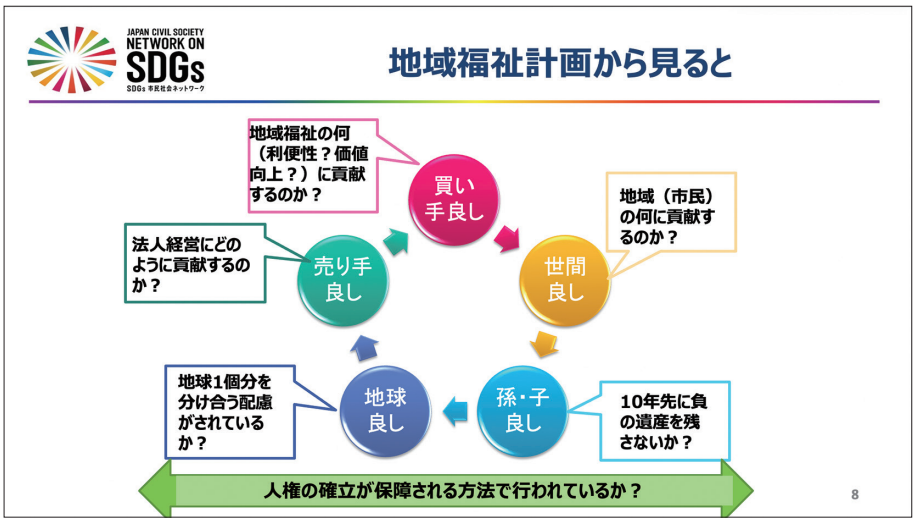


国連も試行錯誤しています。毎年、さまざまな課題を取り上げていて、2019 年には『国連「家族農業の 10 年」』ということが提唱されています。農業を進めるとき、どんな農業形態にしていくべきかということが、議論になっているからです。持続可能性とかサスティナビリティーって言葉が一般化したのは、本当に最近じゃないですか。

持続可能性とは、どういうことなのか。ただ自分たちが続いていくことではない、というのが、国連が言っている SDGs、持続可能性、サスティナビリティーの重要なところです。阪神・淡路大震災のもっと前の 1987 年に、「次の世代の人々のニーズを損なわずに、今の私たちのニーズを満たそう。だから、持続可能にちゃんと開発しよう」と、言っているんですね。

私たちが未来の人のニーズを奪ってはいけない。それは、私は「選択肢を奪わない」ことだと思っています。

夏がこれ以上暑くなり、住めなくなる地域が出てくるかもしれない。そうしたら、未来の人たちに、地球のどこにでも住めるという選択肢を奪ってしまうことになる。自分たちの経営継続のことを考えるのがサスティナビリティーではなく、その先の次世代ニーズを奪わないということがとても重要になっています。



このSDGsの前文には、人間（people）、豊かさ（prosperity）、地球（planet）、平和（peace）を守るために「ソーシャルジャスティス」（社会的正義）の重要性が書かれています。

そして、パートナーシップについての17番が重要になっています。構想としては、2000年から2015年まで考えられていた「MDGs」というものの継承です。環境視点と経済視点の目標があり、これを達成するための目標があるというのがMDSsです。ただ目標を掲げればいいというより、目標を達成するにはこんな目標を達成しないといけないという目標もある。それが、SDGsのユニークな部分でもあります。

しつこく「誰一人取り残さない」ということを何度も申し上げました。これは、宣言文の第4段落の所に書かれています。

あと15年しかないので、やりやすい問題から手を付けていたら厳しい課題が残ってしまう。だから、もっとも遠くに取り残されている人々にこそ、世界を変革して、最初に手を届くよう最大限の努力をしよう、ということです。そのための目標数値が、実は、国連でも色々とできています。

思い切って、一番厳しい問題からしっかり手を付ける。その姿勢に私はとても共感しているし、そうしないと間に合わないと思っています。

SDGsは、17項目の目標だけで見てしまいがちです。例えば2番には「飢餓をゼロに」と書かれていて、これだけを見ると「食べ物をたくさん作ればいいのかな」と思いがちなんですけど、その下のターゲットには「持続可能な農業を促進する」と書かれています。

4番の「質の高い教育をみんなに」という目標も、日本では教育というと学校教育を思いがちです。しかし実際は、生涯学習の機会を促進する方が重要です。

このような形になっているので、ぜひ目標全体も読んでいただけるとありがたいなと思っています。

日本は特に、ジェンダー平等が厳しいです。政治だと、153カ国中144位。健康長寿と言われていても、ジェンダーギャップ指数でいうと135カ国中40位です。経済は日本は世界3位なので、なかなかこの数字のギャップは厳しいなと思っています。

先ほどお弁当の話をしましたが、お弁当一つを取っても、SDGsの視点をいろいろと組み合わせて読み解くことができると思っています。そうすれば、価値観が大きく変化するでしょう。

商売でいえば、近江商人の「売り手良し・買い手良し・世間良し」という、「三方よし」ということです。SDGsを達成しようと思ったら、これに加えて「孫子良し」、そして「地球良し」にもならないといけない。これから商品開発されたり、これからいろいろな計画を作られるときには、三方良しではなく「五方良し」じゃないと駄目だと思っています。

今日は、社協関係の方がたくさんおられるとお伺いしたので、地域福祉計画からの視点でお話させていただきま

した。私は、一番大事なのは、「人権の確立が保障されているかどうか」だと思っています。SDGs でも、全ての人の人権が継続的に確立されていることも大きなテーマです。

ビジネスと人権の計画が、日本でも 2020 年 10 月にできました。ビジネスをするとき、人権が確立された方向で行われているかどうかを、しっかりチェックしようということを、行動計画で示されるようになってきました。

でも抽象的な内容なので、具体的に実施するときには、私は（2 番の）公設性とか、さまざまな人がきちんと参加して実施するプログラムなのかということだったり、経済や社会、環境が考慮されているのか、評価を公表して説明責任を果たすのか、という面がチェックするポイントだと思います。

企画書自体に SDGs がしっかり組み込まれ、実施されようしているかをチェックされることも重要です。

先ほども申し上げているとおり、SDGs は万能なわけではありません。SDGs は、個別的なことをどんどん積み上げていくことは得意分野ではありません。「未来志向」や「アウトサイドイン」と言われる発想ですが、「2030 年にこうありたい、そこから逆算しよう」という考え方で成り立っています。

でも、そレは私たちには、とても難しいことです。来年の計画を立てるときは、「去年より 10パーセント増し」とか、「10 パーセント減らす」とか、そういう、去年よりどうするかというのに教育的にもずっと頭が慣れているので。

アメリカのケネディ大統領が、「月にあと 10 年後に行く」というまず目標を掲げ、そこからアポロ計画を作りました。そのように、「2050 年までの目標をバンと立てる、そこから進める」という、バックキャスティングの発想が SDGs ではとても大事と言われています。

SDGs の認知度は高くなっていますので、日本がしっかり SDGs を達成される方向に向かっていってほしいと思っています。

SDGs には、いろいろな人たちが、全員参加で実践していただきたいです。それにはさまざまな理由がありますが、自治体は地域のすべての面で関わっているので、多角的なチェックが可能です。議会は、一人ひとりの市民の声を拾い上げて政策に反映させる直接窓口です。ですから、SDGs のことを議会、議員の方たちと議論することもとても重要だと思っています。

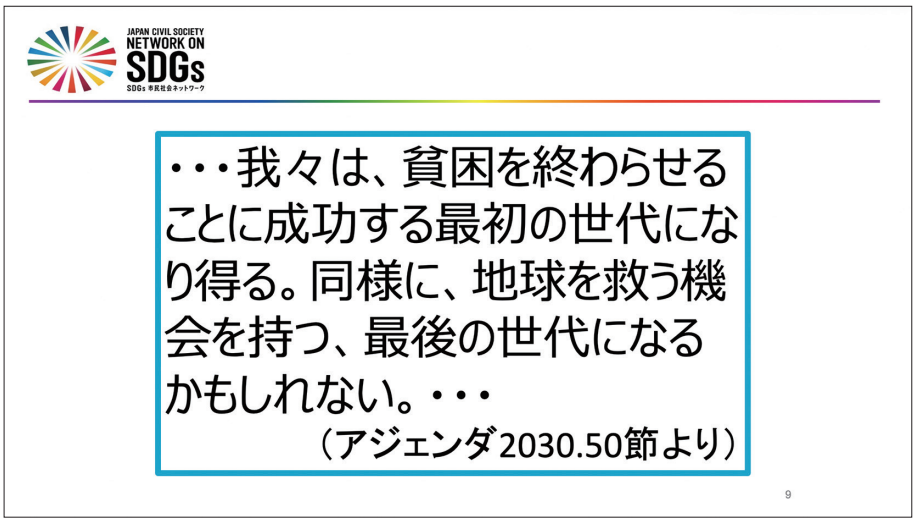
また、地域は変化し続けるものです。誰かに“お任せする”地域では、SDGs の継続は望めません。ですから、みんなで経営する地域に変わることが大切です。その重要性は、社協の皆さんも地域の方たちにお伝えしてきたことだと思います。

企業の方が最も今、加速度的に変化し始めておられます。大量生産や大量消費のワンウェイ経済から、やっとシェアリングエコノミーや循環型でも、しっかりと利益が上げられるモデルも出来てきています。

NPO の人たちや環境活動家の人たちは、ずいぶん前から環境配慮型の経済モデルを提案していましたが、なかなか大量消費、大量生産の流れから脱却できずに、私たちは今も苦しんでいると思います。ウナギが絶滅危惧種に今年指定されましたが、ウナギを毎日、食べなくていいじゃないですか。構造的な変換をどう進めていくか。これは構造変換が必要になってくるので、政策も必要だし、企業の人たちと消費者の声も必要になってくると思います。

あと、私が一番大事だと思っているのは、社協さんや市民社会組織は、課題を抱える市民一人ひとりの代弁者としての役割があると思うんです。ですから私たちは、“社会のアンテナ”だという自覚を持ち、いろいろな意思決定に、私たち一人ひとりの声が本当に反映されているかどうかをチェックするとき、SDGs についての視線を加え

ることがとても重要だと思います。



私はやっぱり、目標17の「パートナーシップで目標を達成しよう」がとても大事だと思っています。

今回の地域共生社会推進セミナーでも、いろいろな立場の方がご参加されています。制度ガチガチで決めるなら、行政がやればいいんです。個人の営みというのは、自由な方がいいと思うので、何でもかんでも制度化しなくていいと思います。

だけれども、みんなの自由だけでやれることではありません。“柔らかい制度”といいますか、そこをどう協働の中で、折り合いを付けながら決めていくか。そこが、SDGsの“肝”かなと思っております。

皆さん、クリスマスケーキをきっと買われますよね。ケーキを買うとき、ぜひSDGsのことを、ちょっと思ってケーキを買っていただけるとうれしいです。いま、関西では阪急阪神電車さん、東京では東急さんが「SDGsラッピングトレイン」という電車を走らせておられます。

私たちSDGs市民社会ネットワークで、このポスターを作ろうということで、会員の皆さまと一緒に作ったりしています。

「モヤモヤするけど、みんなで答えを探して少しでもいい社会にしていこう」。そのために、いろいろな活動をさせていただいています。

皆さん、2030年、皆さんが幸せなためには、どの目標が一番、達成されていないと困りますか。どの目標が達成されていたいですか。そんなことをもう一度、何となくイメージしていただきながら、きょう後半の具体的な事例のお話も聞いていただければなと思っています。

アジェンダの50節に「我々は、貧困を終わらせることに成功する最初の世代になり得る。同様に、地球を救う機会を持つ最後の世代になるかもしれない」と書かれています。ぜひ、SDGsの17の目標だけではなくて、アジェンダの文章そのものを読んでいただけると、より有り難いなと思っております。

ご清聴、どうもありがとうございました。

プロフィール

一般社団法人SDGs市民社会ネットワーク理事・事務局長。高校卒業まで富山県高岡市で過ごし、大学時代は京都へ。東京の民間企業の社員教育部門に3年半勤務。退職後環境NPOなどでの嘱託スタッフやボランティアを経て1998年4月より日本NPOセンターに勤務。2014年8月から2017年3月まで事務局長。2017年4月から2019年3月まで、一般社団法人SDGs市民社会ネットワークと日本NPOセンターを兼任。主にNPOに関する相談、研修、全国大会などの企画・運営とNPO法人制度に関するアドボカシー事業を行う。また、行政や企業のNPOとの連携・協働プログラムの相談や企画運営を行う。パートナーシップが最大限発揮されSDGsが達成されることを目指し、活動中。

シンポジスト 事例発表【1】
愛知県の SDGs の取り組み

愛知県政策企画局企画調整部企画課 主査　奥村　麻奈美氏

愛知県の SDGs の取組についてお話しします。

本日の流れですが、目次に従いまして、まず愛知県の SDGs の取組の概要についてお話しさせていただいて、その後に経済面の取組、社会面の取組、環境面の取組、そして最後に普及啓発の取組についても少しご紹介をしたいと思います。よろしくお願いいたします。

愛知県は、2019 年の 7 月に内閣府から SDGs 未来都市に選定されました。県内では、他に豊田市・名古屋市・豊橋市・岡崎市の 4 市が SDGs 未来都市に選定されています。

グローバル化が進む中で、愛知県が世界から選ばれる地域になるためには、国際目標である SDGs への貢献が不可欠です。また、地方創生を推進する上でも SDGs の理念はとても大切です。

SDGs 未来都市の選定を受け、愛知県では愛知県 SDGs 未来都市計画を策定しました。この計画に基づき、経済面、社会面、環境面、それぞれの面から施策を展開しているところです。また、14 の民間企業さんと包括協定を締結し、産業振興、観光振興、食・農林水産業の振興など、幅広い分野でコラボをしながら SDGs 等に関連する事業を展開しているところです。

経済面では、『世界をリードする日本一の産業の革新・創造拠点』を掲げています。愛知県は、自動車産業を中心とした我が国随一の製造業の集積地です。自動車産業が変革期を迎え、ICT 関連技術が大きく進展している今だからこそ、この地域こそが世界をリードする産業の革新・創造拠点になっていかなくてはなりません。そうしたことから、自動運転の実証実験等に取り組んでいます。

また、新たなビジネスモデルを構築して市場開拓を目指すスタートアップ企業の支援・育成にも積極的に取り組んでおり、その中核拠点となる「ステーション Ai」という施設の整備を市内鶴舞で進めています。

社会面では、未来都市計画で『人が輝き、女性や高齢者、障害のある人など、すべての人が活躍する愛知』を掲げています。女性をはじめ、外国人や若者、高齢者、障害者など、全ての方々の活躍を応援する取組を行っています。

環境面では、『県民みんなで未来へつなぐ「環境首都あいち」』を掲げています。愛知県では、都市化の進行や産業活動により、農地や森林から宅地や道路などへの転換が進んでいます。そんな背景から、生態系の再生・回復、維持、そして温室効果ガスの排出削減に、さまざまなステークホルダーの皆様と連携して取り組んでいるところです。

2010 年に愛知県で開催された COP10（生物多様性条約第 10 回締約国会議）で締結された「愛知目標」の達成に向けて「あいち方式」に取り組んでいます。あいち方式は「生態系ネットワーク」の形成と「あいちミティゲーション」という 2 つの取組を両輪としています。

温室効果ガスの排出を削減する取組としては、FCV や EV、PHV といった環境負荷の少ない次世代自動車の普及促進やそのインフラ整備に取り組んでいます。

その他にも、地球温暖化防止に向けた取組として、地球に配慮した住宅の普及を推進しています。

先月、11 月 16 日に愛知県の次期長期計画である『あいちビジョン 2030』を策定しました。ビジョンの目標年度の 2030 年度は、奇しくも SDGs の達成年度と同じであるため、SDGs の理念や方向性などを踏まえた内容としました。

ビジョンに位置づけた県政全般にわたる重要政策の着実な実施を通じて、SDGs の達成に向けて取り組んでいきたいと考えています。

最後に、普及啓発についても触れさせていただきます。2019 年に実施した県政世論調査では、SDGs を「聞いたことがある」と答えた方が 25% と、まだまだ普及啓発の必要性を感じています。そのため普及啓発パンフレットの作成やセミナー、ワークショップ等の開催、WEB サイトの開設なども行なっています。また、2021 年 2 月 5 日と 6 日の 2 日間、日本最大級の SDGs 推進フェア『SDGs AICHI EXPO 2020』というイベントを愛知県国際展示場で開催する予定です。

シンポジスト 事例発表【2】
なぜ、社協が SDGs に取り組むのか？

稲沢市社会福祉協議会 生活支援コーディネーター　加藤　泰章氏
株式会社ベンリーコーポレーション　営業本部営業企画部　シニアマネージャー　塩沢　護氏

加藤●稲沢市社協の加藤泰章と申します。私の発表は、主に社協職員向けになります。地域共生社会の実現に向けて社協が必要な存在かどうか。SDGs は社協にとっての生存戦略であり、社会から必要とされる社協になるためには何をすべきかを一緒に考えていきたいと思います。

社協がなぜ SDGs に取り組むのか。それは、これまで培ってきた多様なネットワークづくりのノウハウを、SDGs の推進に生かせるからです。もう一つは、SDGs から社協の存在意義を問い直すためです。社会の要請からずれた取り組みを続けている社協は、社会の流れから置いていかれます。

SDGs の推進に向けた具体的な取組をご紹介します。稲沢市社協では、生活支援体制整備事業を通して SDGs に貢献しています。SDGs と生活支援体制整備事業の目指す先は、どちらも同じ地域共生社会の実現です。社協自体がプラットホームとなり、みんながごちゃ混ぜで地域づくりに取り組める稲沢市を作っていくことが私たちのビジョンです。

このように、社協における SDGs 推進の役割は、パートナーシップの強化に貢献することだと考えます。さまざまな分野が連携できるプラットホームができれば、あらゆる地域課題に対応できる社会資源を生み出すことが可能になるはずです。

SDGs を推進するためには、企業との連携が必要不可欠です。ただ、特定の企業と連携すると「公平性が損われる」という意見もありますが、私は『社会貢献活動に意欲的な企業を応援すべき』だと思います。しかも『利益を追求しながら行うべき』だとさえ思います。これらの課題解決には、企業の強み、本業を活かした社会貢献活動が必要です。持続可能な社会貢献活動には安定した利益も必要です。

SDGs から『社協の存在意義』を考えることができます。今、社協が最も恐れないといけないことは『現状維持を続けること』です。SDGs は『現状維持バイアス』から目覚めさせてくれます。私たち社協職員こそ『SDGs を自分事に置き換えて、社協の将来を考えることが必要』だと思います。つまり『SDGs は、自分事』です。

塩沢●株式会社ベンリーコーポレーションの塩沢と申します。私からは、弊社が稲沢社協さんとどのような取組をしているかを説明いたします。

弊社は、生活支援サービスと呼ばれる、年末は大掃除のハウスクリーニング、夏場はエアコンの掃除、春先は引っ越しのお手伝いなど、暮らしに密着したサービスを展開している会社になります。

私たちは、現在はまだ、そこまで SDGs についての考えは薄いのかなと思います。ただ、サービスを提供しているお客さまは、創業以来 30 年間、高齢者が多い。「地域で困っている方を助けたい」という思いの事業と、SDGs で掲げていることは結び付いていると思います。私たちは事業を通し、地域貢献活動を推進し、住み続けられるまちづくりを目指して具体的に取り組んでおります。その中で、稲沢社協さんとの取り組みの具体的事例を紹介させていただきます。

私たちは、大きく２つの活動をしています。１つは、安心・安全なまちづくりへの貢献です。稲沢市では家具転倒防止補助制度という市の事業があり、その広報・啓発活動に取り組んでいます。名古屋市でも家具転倒防止の啓発を行なっています。

防犯については、『地域安全対策ニュース』という愛知県警さんのチラシを自前で印刷し、お客様に配布をしています。

２つ目の活動として、地域の人や企業、市役所といった垣根を越えた地域づくりの応援として「ベンリー地域包括ケアシステム」という仕組み作りを進めています。その第一歩として、稲沢市社協さんと協力しながら「地域見守り隊」を作りたい。ボランティアでは事業の継続が難しいので、ポスティングをやっていただくことでお金をお支払いし、同時に高齢者の見守り活動をするということです。

私たちは愛知県内でも多く店舗がございます。稲沢市の社協さんと取り組んでいるようなことができるのであれば、他の市町村でも声を掛けていただければと思います。

シンポジスト 事例発表【3】
地域住民への買い物支援の取組

社会福祉法人愛知慈恵会

一宮市地域包括支援センター萩の里　センター長　坂崎　雄清氏

一宮市萩の里特別養護老人ホーム　施設長　徳田　清仁氏

徳田●今回、ご報告をさせていただく事例は、地域住民への買い物支援の取り組みです。

きっかけは、平成 28 年の社会福祉法改正で地域貢献活動が義務化されたことです。それに当たり、何ができるかというところから出発しました。

私どもの法人は、約 30 年間、高齢者福祉に特化した事業展開をしてまいりました。そのため、老人ホームやデイサービスといった事業の運営にはノウハウもありますが、地域貢献については、全くの手探り状況でした。そこで、当法人の中にあり、地域の実情をよく知っている地域包括支援センターにコーディネーター役をお願いし、地域貢献として買い物支援の実現に至りました。以下、活動の経緯を時系列で発表します。

坂崎●当法人は一宮市に本拠があります。今回、支援の中心になったのは「萩の里」という施設です。この萩の里の中に、地域包括支援センターも併設しています。

包括支援センターの担当地域の中で、今回買い物支援が実現したのは、一宮市大和町の氏永という地区です。

稲沢市との市境近くにある地区で、昔からの集落で旧家も多く、周囲にはコンビニやお店は 1 軒もありません。公共交通機関は不便なので、移動は自家用車が中心です。

その地域の民生委員さんから「買い物に困っている高齢者がいる。どこか買い物支援ができないか」というお話を聞きました。

当法人としては、地域貢献の活動をしたいと考えていても、地域の方はどんな支援を望んでいるかよく分からない、そんな悩みがありました。そこで、市の方へ相談に行ったところ、包括支援センターに話が行き、地域と法人の声が集まった結果、買い物支援というお話がマッチングする運びとなりました。

まず法を確認し、包括支援センターが市と連携して企画・調整し、話し合いのための協議会を設置しました。構成メンバーは、町内会側と、関係機関として包括、市、社協さん、あとは法人側ということで法人の職員が会議を何回か行いました。そして足かけ 1 年ぐらいかけて、事業実施に至りました。

この間のプロセスとしては、地区で具体的にニーズがあるのか、買い物支援を行なったら利用したいか、どこのスーパーに行きたいか、という意識調査の住民アンケートを実施しました。その結果を基に、協議会で検討をさせていただき、運行計画を作りました。そして、法人、町内会、関係機関の中でいろいろな役割分担を検討し、3 日間のお試し運行を計画いたしました。その運行で再度アンケートを取り、「買い物時間は 60 分ぐらいがいい」とか、頻度は「2 週間に 1 回ぐらいでいいのでは」という意見などもいただき、実施計画の参考にしました。

2019 年 12 月から事業を実施しておりますが、残念ながらコロナ禍により、現在は中断中です。2021 年には再開を目指しています。

なお一宮市全体としては、6 法人 9 地区で、現在、買い物支援の事業が実施されています。

地域協働によるメリットは、地域としては困り事の解決が図られ、住民同士の互助が形成できます。また法人側としては、地域貢献はもちろん住民への法人の PR、職員のモチベーションアップや定着化にもつながります。

「地域貢献したい」という企業や団体は多いのですが、地域にどのようなニーズがあるのか分からず、押し付けになってしまう可能性があります。また地域側も「何かやってくれ」と、丸投げしてしまう可能性もあります。それではうまくいかないので、話し合いを深め、互いが主体者として協力し合っていく形を作るのが、事業継続において大切だと思います。

また、関わる法人も、地域の一員の認識を持って取り組みを進めていく必要があるのかなと思います。

一つの地域の一つの事業ではありますが、今後の何かの参考になればと思います。

シンポジウム（意見交換と討議）

■コーディネーター（司会）

愛知県社会福祉協議会ボランティアセンター運営委員会　委員長　鈴木　盈宏　氏

■助言者

一般社団法人 SDGs 市民社会ネットワーク 理事・事務局長　新田　英理子　氏

■シンポジスト

愛知県政策企画局企画調整部企画課　主査　奥村　真奈美　氏

社会福祉法人稲沢市社会福祉協議会　生活支援コーディネーター　加藤　泰章　氏

株式会社ベンリーコーポレーション　営業本部営業企画部　シニアマネージャー　塩沢　護　氏

社会福祉法人愛知慈恵会

一宮市域包括支援センター萩の里　センター長　坂﨑　雄清　氏

一宮市萩の里特別養護老人ホーム　施設長　徳田　清仁　氏

鈴木●それでは、ここから報告をしていただいた方同士で、何か不安に思っていることとか、今後どうしたらいいんだろうとか、そういったような質問等を含めて、パネラーさん同士で質問があればお願いいたします。

　では最初に、坂崎さん、よろしくお願いします。

坂崎●先ほどは、当方が一宮市で行っている買い物支援の状況を報告させていただきました。稲沢市でも、SDGs の関わり方の中で、買い物支援の取組をされていると聞きました。その状況についてお聞きしたいのですが。

加藤●稲沢市でも、社会福祉法人の送迎車両を活用した移動支援の取組として、買い物支援を行なっています。経緯としては、社協が地域から買い物支援のニーズを聞き出し、地元の社会福祉法人に伝えて実現しました。

　ポイントとしては、社会福祉法人だけが作るのではなく、地域の皆さんと共につくるという点です。社協がコーディネート役を担い、みんなで買い物支援の仕組みをつくりました。これは SDGs の考えと同じで、移動支援を行政や社会福祉法人に任せるのではなく、みんながそれぞれ出来ることをするという考え方です。社協の役割としては、みんなを巻き込むこと、そしてみんなの意欲を引き出すこと、みんなの強みを引き出すこと、この３点だと思います。

鈴木●ありがとうございました。せっかくの機会ですので、ご参加された皆さんの中から質問はありますか？

参加者●シオンクラブの小塚と申します。愛知県の取組についてお尋ねします。いっぱいご報告い

ただいてすごいなと思いました。

そこで、社協さんや弊社のような小企業でも、先ほどご紹介いただいたSDGs推進フェアへの参加ですとか、県の事業と一緒にやれそうな取組だとか、そういったものはあるんでしょうか。

奥村●ご質問いただきまして、ありがとうございます。昨年度SDGs未来都市に選定されて以降、まずは皆さん一人一人への普及啓発から集中的に取り組んでいるところです。

国が地方創生SDGs登録・認証等制度の構築を検討しているところであり、本県としても制度設計を検討しているところですので、そういった制度も活用しつつ、今後、企業の皆様との連携についても進めていければと思います。

鈴木●最後に今日、SDGsのプロである新田さんからアドバイスがいただけたらと思います。

新田●今日のキーワードは「連携」だったと思います。自分たちの本来の役割を少し超えて、殻から少しはみ出て連携をするということも、SDGsの達成にも必要だということを皆さんの事例から学ばせていただきました。

抽象的な表現ですが、私は歴史認識をしっかり持つことがとても大事だと思っています。SDGsはとても新しいことのように感じるかもしれないですが、それぞれの方がそれぞれの経緯と歴史を持っておられます。

例えばCO_2排出量も、先進国は今までたくさんCO_2を出してきたからこそ、この繁栄があります。それなのに突然、「CO_2を一律にマイナス5パーセントにしてください」と言うのは、公平な責任の分担でしょうか。それぞれの歴史認識から逃げずにしっかり持つことが、レベルアップするためには重要だなと思っております。

もう一つ、具体的なレベルアップについてです。先ほど坂崎さんもおっしゃられたように、今日のように人前でSDGsの行動を発表すると、当事者のモチベーションも上がるということです。

日本は2021年7月、ニューヨークで、オンラインでSDGsの進捗報告をボランタリーにレビューすることになっています。世界に向けて、自分たちの地域の、自分たちのSDGsを発表するという、絶好の機会です。ぜひ、そのような場をどんどん活用していただけるといいなと思っております。

きょうは本当に大変素晴らしい事例をたくさん聞かせていただき、ありがとうございました。

鈴木●ありがとうございました。

最後に、マザー・テレサの言葉で「大海も一滴の水から」という言葉を紹介させていただきます。それぞれ皆さんのやっていらっしゃることは、小さなことという意識かもしれません。一滴の水かもしれません。しかし、それが集まれば大海になる。みんなで協力して行動すると、大きな力になるということだと思います。

このSDGsは、自分たちがやっていることだけではなく、必ずいろいろな所との接点があります。ですから、いろんな所に関わっ

ていただき、自分たちの情報を発信し、そして向こうの情報をいただくように、互いにコラボレーションすることも視野に入れながら前に進んでいくということが大事かなと思います。

そして、最後は皆さんが行ったことを振り返り、評価・検証していただきたいです。その評価も、自分たちの仲間内だけで評価すると、どうしても自己満足になってしまう。第三者にいろんな視点から評価をしていただければ、自分たちの世界だけでは見えなかった点があり、思わぬ評価をされるという気付きもあります。

それを真摯に受け止めて、そしてまた自分たちで検証しながら前に進んでいく。良かった点はさらに伸ばす。課題ができたら、その課題をみんなで話し合って解決していく。こんなことの積み重ねで前進していく。そして、横のつながりを持ちながら進んでいく。

一つ一つの小さな力かも知れませんが、それが SDGs ではないでしょうか。

きょう、素晴らしい報告をしていただいた報告者と基調講演をいただいた新田さんに、大きな拍手をお願いいたします。

そしてもう一つ。最後になりますが、今日、この SDGs のセミナーについて、どんなことでもいいので、「私にとって勉強になった」と思う人、手を挙げて下さい。

（挙手）

鈴木●ありがとうございます。もしここで挙がらないと、来年から私もクビになってしまうと思いますが（笑）。ということで、皆さん何らかのご参考になったかなと思います。

以上で、事例報告会を終わらせていただきます。どうも皆さん、ご協力ありがとうございました。

ネットワークタイム

令和２年度　地域共生社会推進セミナー　日程表

開催日：令和２年１２月９日（水）午後１時３０分～午後５時
会　場：アイリス愛知　２階　コスモス

時間	次第	内容
13:00	受付	
13:30～	開会	
13:30 ～14:30 （60 分）	Ⅰ講　　話	**『SDGs とは何か？社会はどう変わるのか？～市民社会の実践から～』** 【講師】 一般社団法人 SDGs 市民社会ネットワーク 理事・事務局長　新田　英理子　氏
（10 分）	休憩	
14:40 ～16:00 （80 分）	Ⅱ事例報告会	**～地域共生社会と SDGs～『誰一人取り残さない』** 【ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ】 愛知県社会福祉協議会ボランティアセンター運営委員会 委員長　鈴木　盈宏　氏 （公益社団法人スペシャルオリンピックス日本・愛知理事長） 【助言者】 新田　英理子　氏 【報告テーマと報告者】 ・「愛知県の SDG s の取組について」 愛知県政策企画局企画調整部企画課　主査　奥村　麻奈美　氏 ・「SDG s 推進における社協の役割 ～なぜ、社協が SDG s に取り組むのか？～」 社会福祉法人稲沢市社会福祉協議会 生活支援コーディネーター　加藤　泰章　氏 ・「SDG s 推進に関する取り組み」 株式会社ベンリーコーポレーション　営業本部営業企画部 シニアマネージャー　塩沢　護　氏 ・「地域住民への買い物支援の取組」 社会福祉法人愛知慈恵会 一宮市地域包括支援センター萩の里　センター長　坂﨑　雄清　氏 一宮市萩の里特別養護老人ホーム　施設長　徳田　清仁　氏
16:00 ～17:00 （60 分）	Ⅲﾈｯﾄﾜｰｸﾀｲﾑ	参加者皆さんによる、新たな出会いの場、新たなアイディア発見のきっかけづくりのための交流会

令和２年度
「地域共生社会推進セミナー」
報告

社会福祉法人愛知県社会福祉協議会　地域福祉部
〒461-0011　名古屋市東区白壁一丁目 50 番地
TEL052-212-5502　FAX052-212-5503
ホームページ　https://www.aichi-fukushi.or.jp/